

山陽地域と東海地域における縄文時代人骨のSr同位体分析 Strontium isotope analysis on human skeletal remains of the Jomon period from Tokai and Sanyo regions in Japan.

日下 宗一郎^{1*}

Soichiro Kusaka^{1*}

¹ 総合地球環境学研究所

¹ Research Institute for Humanity and Nature

風習抜歯は、縄文時代後・晩期の人骨に高頻度で認められ、その型式は、上顎の犬歯と下顎の切歯を抜く4I系と上下顎の犬歯を抜く2C系に大別される。しかしながら、抜歯を行った意味、型式の違いの意味は解明されていない。本研究は、縄文人骨を対象として、ストロンチウム同位体分析による移入者の判別を行うことで、この問題の解明を試みた。陸水や植物に含まれているストロンチウムの安定同位体比 ($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$) は、流域の地質に対応した地理的变化を示す。人体に含まれているストロンチウムは飲食物に由来するので、その安定同位体比から、居住地域やさらにヒトの移動なども推定できる。本研究では、山陽地方(大田貝塚、津雲貝塚)と東海地方(吉胡貝塚、稲荷山貝塚)の遺跡から出土した、縄文時代中期から晩期(約5000-2300年前)に属する人骨を対象にした。ストロンチウム同位体比の違いによって、人骨集団の中の「移入者」を判別し、「移入者」と性別や抜歯型式との関係を検討した。山陽地方の大田貝塚集団と津雲貝塚集団では、それぞれ1個体の「移入者」を判別することができた。しかし、山陽地方では遺跡周辺の植物のストロンチウム同位体比の変動が大きく、明瞭な地域差が見られなかった。よって「移入者」と判別されなかった中に、実際の移入者が含まれている可能性は否定できない。一方、東海地方では、植物の値に顕著な地域差が見られ、ストロンチウム同位体分析が集団間移動の解明手段として有効であることが明らかとなった。吉胡人骨では、36%の個体が「移入者」と判別され、女性よりも男性において「移入者」の割合が高かった。稲荷山人骨では、24%の個体が「移入者」と判別された。4I系人骨と2C系人骨は「移入者」と「在地者」をどちらも含み、4I系人骨が在地者で2C系人骨が移入者を意味するという従来の仮説を否定する結果が得られた。本研究の結果、縄文時代に抜歯風習や性別が、食性や集団間のヒトの移動に関連していたことが明らかとなった。

キーワード: ストロンチウム同位体比, 人骨, 歯, エナメル質, 同位体地図

Keywords: strontium isotope ratio, human bone, tooth, enamel, isoscape